

2013 年度 事業報告書



学校法人 **アジア学院**
アジア農村指導者養成専門学校

annual report

2013/4/1
～ 2014/3/31



40周年記念 アート

40th anniversary
commemorative art

創立40周年を記念するために作られたアート。記念事業にご参加下さったサポーターと卒業生、そしてアジア学院コミュニティメンバーと一緒に工夫しながら作り上げることが出来た。木の絵は、平和を象徴するオリーブの木をイメージし、葉はみんなの手形で描かれている。緑色は農村指導者養成プログラムのために働く職員とボランティアの手、黄色は2013年度の学生、赤は実を結んできた卒業生の手である。幹はサポーターを意味する。右下のキルトは卒業生たちが母国から持ちよった布をパッチワークで縫い合わせたもので、「共に生きる」ことを意味している。

目次

table of contents

1	ご挨拶	
2	40周年記念事業	
6	震災復興	
7	放射能対策	
8	研修報告	17
10	カリキュラム	アジア学院サポーターの会 アジア学院北米後援会
11	フードライフ	18
14	共同体生活	アジア学院コミュニティ
15	卒業生活動	19
16	国内事業&セールス	支援者・支援団体一覧
		20
		会計
		back
		2013年度卒業生



ご挨拶

greetings

2013年9月16日の創立記念日において、1973年のアジア学院創設から数えて創立40年の記念のときをもちました。40年の歩みを導いてくださった神に感謝すると共に、またこの40年間にアジア学院が多くの個人・団体の皆様によって支えられて来たことを改めて覚え、感謝せずにおれません。

今日まで卒業生は、主にアジア、アフリカなど55カ国に拡がり、1273名を数えています。一人ひとりの卒業生が創立の精神“ That We May Live Together”（共に生きるために）を大切にして歩み続けて欲しいと願っています。また、創立記念式及びシンポジウムには卒業生を初め多くの方々にご出席くださいました。アジア、アフリカなどの貧しい農村に住む人々は、今日も貧困、民族紛争、自然災害などの問題で苦しんでいます。人々の苦しみに寄り添い、人々に仕える草の根農村リーダーの養成は、アジア学院にとって今後とも取り組むべき最も大切な課題であると考えています。

アジア農村指導者養成専門学校では、2013年度も32名（内1名研究科生）の学生全員を無事卒業生として送り出すことが出来ました。学生の研修のために本当に多くの皆様のご協力・ご支援をいただきました。

東日本大震災後の災害復興事業につきましては、2013年度も引続き海外の関係教会から温かいご支援をいただき、昨年5月には、新男子寮及び新豚舎が完成しました。また、東京電力福島第一原発事故後始まった放射能計測のための「アジア学院ベクレルセンター」は、市民ボランティアの献身的な協力の下、アジア学院すべての農作物や市民から依頼された食べ物などの計測を行なっています。食べ物といのちを大切に、地域社会とのつながりを大切にするアジア学院でありたいと願っています。

最後に、様々な形でアジア学院のことを覚え、祈り、支えてくださった皆様への感謝と共に、この報告書をお届けいたします。

学校法人アジア学院
アジア農村指導者養成専門学校
理事長・校長 大津 健一

創立 40周年 記念

40th anniversary

ARI 1973 - 2013

40周年記念事業の参加者による稲刈りの後で

第1日目 記念式典

9月16日
monday

台風の直撃にも関わらず、記念式典には、国内外より2000名を越す方々が会場となったアジア学院のコイノニア（食堂・多目的ホール）にアジア学院の現役の職員、卒業生、学生、ボランティアたちと共に集まって下さった。参加者のうち今回のシンポジウムのリソースパーソンとなるアジア学院卒業生は16カ国から57名を数えた。

式典では4名のご来賓より祝辞を賜った。卒業生を代表して第1期卒業生のジェローム・サダール氏（バングラデシュ）、海外支援団体を代表して合同メソジスト教会救援委員会（UMCOR）のメリサ・クラッチフィールド氏、国内の支援者を代表してロータリー米山記念奨学会理事長であり、栃木県経済同友会筆頭代表理事である板橋敏雄氏、そして福田富一栃木県知事である。この4名のご来賓は、それぞれ長年のアジア学院の業績を讃え、これまでの支援と協力の成果を喜んで下さった。また式典では25年以上に亘って継続的にご支援をいただいた以下の8団体に感謝状が授与された。

感謝状授与団体：一般財団法人アジア農村交流協会、日本基督教団西那須野教会、日本基督教団全国教会婦人会連合、日本聖公会婦人会、ロータリー米山記念奨学会、東京ユニオンチャーチ、ARISA・アジア学院サポーターの会、AFARI・アジア学院北米後援会

パネルディスカッション

40周年記念シンポジウムは第1日目の午後、昼食後に開始された。初めに2名の卒業生から今シンポジウムのテーマに即して「草の根の変革と未来へのビジョン」と題して発題がされた。1人目の発題者はインドの卒業生でSEEDS—INDIA代表で国際的な平和運動を展開しているトーマス・マシュー氏であった。マシュー氏はアジア学院での研修を通じて、南インドの自身のコミュニティーで起きた「変革」について話し、農村開発の推進役、指導者の育成事業の未来に向けて「平和問題と環境問題、特に核兵器、核エネルギー、武器取引の問題、諸宗教間対話などの積極的解決法、ソーシャルメディアの活用、代替エネルギー、持続可能な開発、人権教育にもっと焦点を置くべき」と提言をした。



Transformation at the Grassroots 40 Forty Years of Walking with Rural Leaders

農村指導者と共に歩む40年 草の根における変革



発題者2人目は、アフリカ・ザンビアの卒業生であるジュディス・ダカ氏であった。彼女は卒業後に自分自身が「謙虚な仕える指導者」へと変えられ、社会的に最も困難な状況にある人々、特に HIV エイズに感染した女性や孤児たちが食糧生産を中心とする「生きていくための技術」を修得するための研修所（同じく卒業生である夫が創設）を紹介をした。彼女の未来への提言は、日本で研修を受けたアジア学院卒業生たちが真に自立をして継続的に活動をしていくためのバックアップ態勢を日本で構築して欲しいということ、またアジア学院の更なるカリキュラム整備、研修終了後の資格授与等であった。

2名の発題者の発表に引き続き、パネルディスカッションに入った。シンポジウムと同じ「草の根の変革と未来へのビジョン」というテーマで、それぞれの体験に基づき4名の卒業生がパネリストとなり発表を行った。4名のパネリストたちは、卒業後にそれぞれの地域で「仕える指導者」として働くために必要な資質をアジア学院の研修で養ったことを話し、各々が独自の方法で自分の修得した知識や技術を地元のコミュニティーのニーズに適応した形に「翻訳」し、様々な開発プログラムを展開していると発表した。またそれぞれが数々の困難に直面、特に安全な農業を行うよう農民の考えを変化させていくことにおいては並々ならぬ努力が

必要であったこと、同時にアジア学院での新しい学びをどのようにうまく実践へと転換させ成功へ導いていったかという内容の発表を行った。

第2日目
9月17日
tuesday

グループ別セッション

第2日目はグループ別セッションで始まった。一般参加者、アジア学院卒業生、現役の学院メンバーが、7つのテーマ別に約20人ずつのグループに分かれた。各グループではそれぞれのテーマに焦点をおいた発表者の体験発表を中心にディスカッションを行い、「農村での変革の経過と課題」を話しあった。7つのテーマは以下のとおり。

- ① 有機農業と環境
- ② 女性問題とジェンダー平等
- ③ 子どもと青少年
- ④ 平和構築
- ⑤ コミュニティーにおける宗教の影響
- ⑥ コミュニティーを中心にした変革
- ⑦ 長所を活かすコミュニティ開発





合同発表

2日目の午後は7グループのディスカッションの発表が行われた。発表の後それぞれのグループからディスカッションの成果が書かれた紙が、「アジア学院の今後のビジョン策定につなげていって欲しい」との願いとともに大津健一校長に手渡され、2日間のプログラムは終了した。

アジア学院 40 周年略史の発行

アジア学院 40 周年略史「草の根の指導者と共に—40 年の歩み—」(英語版“Forty Years of Walking with Grassroots Leaders”)を日英語版同時に9月16日に発行した。日本語版1000部、英語版700部を印刷した。編集作業は1年かけて行われ、菊地創氏、長嶋清氏、楠利明氏など元職員の協力があつたことを感謝したい。

共に生きるために
that we may live together



参加
卒業生

visiting
graduates

- 1987 [ウガンダ] Mutesfara Godfrey
- 1988 [インド] Thomas Mathew / G. Sugantha Kumar
[フィリピン] Imo Boerano
- 1989 [韓国] Jun Kwon Kim / Hye Dug Won [タイ] Bamrung Kayotha
- 1990 [スリランカ] Wimal Dissanayke
- 1991 [インドネシア] Debora Sinaga
- 1995 [ネパール] Sayni Chaudhari [フィリピン] Celenia Jamig
- 1997 [日本] Munetada Yasuda [ミャンマー] Donald Paul
- 1998 [インド] Robert Gabriel Machado [日本] Fumiko Nakashima
Yasuda [インドネシア] Mathius Sarangnga [スリランカ]
Sumanananda Thero
- 1999 [日本] Kaori Sakuma
- 2000 [スリランカ] Chamika Jayasinghe [インド] Zacivolu Rhakho
[日本] Joseph Abonmai
- 2001 [ザンビア] Judith Daka [ガーナ] Bernard Timothy Appau
- 2002 [ミャンマー] Stylo [スリランカ] Makeen Mohammad
- 2003 [インド] Vijayasingh Ronald David
- 2004 [ミャンマー] Ngaai Meng [スリランカ] Renuka
Meegaakoratuwe [フィリピン] Gilbert Pinnoy Hoggang
- 2005 [インド] Thangsat Kipgen / Mutsezo Tetseo
[ミャンマー] Daniel Myo Aung / Bya Sa Mu Ye
- 2008 [スリランカ] Lasitha Kumara
- 2009 [カンボジア] Ven Ban [カメルーン] Christina Fonge
[日本] Erika Saito / Tomoyo Doi
[ネパール] Bishwa Raj Gurung [タイ] Khanuengnit Polhayan
- 2010 [ミャンマー] Saw Manar Shay

- 1973 [バングラデシュ] Jerome Sardar
- 1975 [インド] Inacio Almeida
- 1976 [バングラデシュ] Mildred Sardar
[タイ] Rungrote Tangsurakit
- 1977 [スリランカ] Lakshman Perera / Nelum Jayasekara Perera
- 1978 [スリランカ] Bernadine Yatawara David
- 1979 [インド] Surendra Kumar Vettiwel
- 1982 [インド] G. Sugirthan Thambyraj
- 1983 [ザンビア] John Nyondo
[韓国] Jeen-hae Chung / Hyung-wook Ban
- 1984 [インド] Ellen Konyak [マレーシア] Hwee Noi Tan
- 1986 [バングラデシュ] Anwar Hussain [日本] Takeshi Murakami
[フィリピン] Joel Alviar

世界 16 カ国 57 名の卒業生を含む 280 名を超える方々にお集まり頂き、2013 年 9 月 16 日～17 日の 2 日間に亘って開催したアジア学院創立 40 周年の記念行事。シンポジウムでは、「草の根の変革」というテーマで、記念講演、パネルディスカッション、グループディスカッションなどを通じて様々な意見が交換された。

学院職員は全員でそれらの意見や提言を冬の間（12 月～3 月）に時間をかけて深く議論し、五つの項目にまとめた。理事会、評議員会はそれを「アジア学院 40 周年記念共同体宣言」として学院の公式宣言として承認した。私達はこれを 41 年目のスタートラインに指針として据えていきたいと考えている。

アジア学院 40 周年記念共同体宣言

アジア学院にとって歴史的な出来事となった 40 周年記念式典及びシンポジウムを通じて、私達は世界の状況が変化の只中にあることを目の当たりにしました。

そして、地方から都市部への人口移動、気候変動とその農村社会への影響、平和と紛争とが私たちの研修と交わる現実、様々な文化や宗教また世界観を持つ者同士がどうしたら共生できるかなどの課題が明らかになりました。

これらの課題に、私達は速やかに、また長期的に行動していきます。

私達は以下に示されているアジア学院の価値を再確認してゆきます。

- (1) 全ての仕える指導者を養成する目的と目標のための様々な研修科目のうち、有機農業をその一つの方法として活用を継続します。
そのことにより、農村指導者を仕える指導者に育てる使命を引き続き遂行していきます。
- (2) 「農村」という言葉を再生することに努めてゆきます。
食糧主権は人口増加にとっての課題であるので、
全ての人の食べ物のために働く農村指導者の重要性への信念を固く持ち、
都市住民に対して彼らが生きるためには農村の支えが必要不可欠であることを理解してもらうよう努めます。
- (3) アジア学院は、キリストの愛に根ざした共同体であり、
信仰が単に語られるだけでなく実践される場であること、
またこの共同体の構成員一人一人がそれぞれの多様な宗教的信念と伝統を分かち合うことにより、
誰もが精神的に成長できる場であり続ける努力をします。
- (4) 私達を取り巻く世界が変化していることを認識し、
現在の課題を理解しまた発信することに努力します。
この目的の為、新たに出てくるニーズにより良く対応できるように
職員を継続的に教育することに取り組みます。
- (5) 卒業生とその所属団体がそれぞれの地域において、
彼らの活動の影響が発展的に変化し続けるように、
アジア学院は彼らと連絡を取り合い、
また彼らとの関係がどうしたら最もよいものになるかも追求していきます。

アジア学院は、神から持続的に与えられる恵みによって農村共同体が総合的な成長を実現するため、女性も男性も有能な変革の実践者と変え、彼らの能力を開発することが最も重要な目標であることをこれからも信じてゆきます。私達は「実践から学ぶ」ことを大切にし、
信頼を勝ち得るためまた農村共同体と世界に変革をもたらすための着実な手段としてのフードライフに新しい重要性を認め、それを探求してゆきます。



震災 復興

reconstruction

2011年3月の震災直後から法人、学校一丸となって取り組んで来た復興事業は、13年度大きな節目を迎えました。震災に見舞われた11年度は、女子寮等被災した建物の応急修理と農業研修棟を増改築しての本館機能の回復、12年度は、コイノニア食堂棟と教室棟の新築、そして本13年度には、男子寮と豚舎が完成致しました。

11年度は、建物施設の被災とキャンパスから僅か110km北東の福島第一原発からの放射能の影響で、都内に疎開しての研修を強いられ、又生産した野菜や肉も食用にできませんでした。12年度は、取り壊し予定の旧コイノニアの2階だけを食堂と教室にして凌ぎ、漸く13年度に男子寮が7月に完成、男子学生は仮住まいから解放され、また新豚舎により以前同様の畜産研修が可能になりました。研修施設に関する限り、震災前以上の教育環境がこの13年度に整えられ、このことは復興事業のみならずアジア学院40年の歴史の中でも正に節目の年でもあったと感じます。

快適な男子寮

今年度約1億4千万円を要した男子寮は、ドイツのディアコニア災害救援(DKH)、米国長老教会(PCUSA)そして米国合同メソジスト教会

(UMC)のご支援によって建設されました。今回の被災を教訓に、軽量で堅牢な木造2階建てとし、敷地の地形から学生とボランティアの居住する学生寮と単身職員及びカップルのボランティアが滞在する職員寮との2棟に分けて建設いたしました。学生寮は、総面積482㎡(145坪)で1階に8畳サイズの2人部屋5室、2階に同9室計14室、最大33人を収容することが出来ます。また以前はなかった18畳を超えるCOMMONルームは、外のウッドデッキ13畳分と合わせるとキャンパス全体の眺望も楽しみ、学生が一日の研修を終えた後、くつろぎの一時を約束するものと思います。一方職員寮は、総面積152㎡(46坪)で、1階に職員用個室4部屋、2階に専用シャワーとトイレを備えたカップル用の2室を設け、長期滞在にも対応できるようになりました。いずれも学生にとってことさら厳しく感ずる栃木の早春、晩秋の寒さに備え、太陽光を利用した床暖房設備を整えました。

新しい豚舎

豚舎も2棟からなり、内1棟は30m×9m、270㎡の中に、分娩室、母猪用の5室、バイオガスプラントに接続している肥育室3室があり、もう1棟は25.5m×8m、209㎡で全て発酵床の肥育用7部屋があり、合わせて年6~70頭の研修と生産が可能です。4千2百万円を超えた建設費は、米国福音ルーテル教会(ELCA)に支えられました。





この他規模は大きくなくても研修や学生の生活に欠かせない様々な施設設備に、今年度も国内外の数多くの団体並びに個人の方々のご支援を頂き、3年前には想像することすら難しかった今日の復興が実現致しました。これらのご支援による建物・施設は、主イエスが私達に託した道具であり、これからの農村開発指導者の養成事業に真摯に謙虚にそして大胆に取り組んで行くことで、ご支援頂いた皆様に応えていかなければならないと感謝と共に覚悟を改めております。

法人
財務室長

遠藤 抱一

放射能 対策

radiation clean-up

農場の基本方針と 放射能汚染

学院はこれまで、いのちとそれを支える食べものを大切にする世界を目指して有機農業を基礎とする有畜複合農業を実践してきました。環境や生態系の循環を破壊し

ない農業のあり方、外部の力に過度に依存しない自立した農村のあり方などをアジア、アフリカの学生と共に学ぶ場をどう創造してゆくかが課題でありました。これは今でも変わりません。

しかし、2011年の東日本大震災の原発事故以降と以前では明らかに違いがあります。事故以降は、空気、水、土、食べものなど、人間が生きていく上で必要不可欠なものが放射能で汚染され、これと学院内でも闘っていかなければならなくなりました。放射能という人体に有害な物質を学びの場に抱え込むことになったのです。

このため 2011 年から今日まで、学生の安全を確保することを最重要課題と考え、アジア学院ベクレルセンターを設立し、学院内外のあらゆるものの放射能を継続的に測定してきました。ベクレルセンターの測定ボランティアの方々には、いくら感謝しても足りることはありません。

放射能モニタリング

現在、学院で採れた露地野菜の測定値は N.D ~ 10Bq/kg であり、学院基準 37Bq/kg を下回った。基準を超えたものは以下の表の通りである。

ARI products exceeding the radiation standard

2013年度アジア学院の基準値を超えたもの

	セシウム (Bq/kg)	基準値 (Bq/kg)
竹の子	97.58	食べもの 37.0
茶葉	69.17	
しいたけ	261.31	
木灰	6,234 ~ 28,744	肥料 400.0
木灰	592.22	
堆肥	1,066	
針葉樹 (井戸)	13,996	
池の底の土	856	

木灰や樋に溜まった針葉樹の落葉などの放射線量の高いものは、放射線避けいフレコンに入れ、生活空間から最も遠い学院敷地の南隅の旧しいたけ栽培林に保管し、極力人が触れることがないように配慮した。

また畜産物に関しては、飼料原料及び飼料と、それを給与して生産した畜産物の放射能測定を定期的に行っています。飼料については外部から仕入れている米ぬかや米粉などのほか、それを配合した発酵飼料やサイレージ用のとうもろこし、畜産産品については豚肉、鶏肉、鶏卵、合鴨肉、合鴨卵、魚を測定しました。



アジア学院ベクレルセンター (ABC)

開設から2年を経過したABCは、放射能の値が減少するとともに人々の放射能への関心が薄れて外部からの検体数が減ってきている。そのためキャンペーンやトークセッションを企画した。測定ボランティアの方々の献身的な努力は変わらずアジア学院のすべての生産物、そしてそれぞれの場所の畑や田んぼの土の測定を行っている。

- ・7月 トークセッション「のぞいてみよう放射能と不安」
- ・10月 「収穫感謝の日」(HTC)にて地域の放射能汚染の現状について説明会開催
- ・3月11日 震災の日を覚え、測定ボランティア高嶋さんがアジア学院のメンバーに対し地域の汚染状況を説明
- ・「春の山菜キャンペーン」、「秋の味覚キャンペーン」を行い、比較的放射能の値の高い食品の計測を促進
- ・購入した食品であれば、レシート持参で500円で測定するサービスを開始

農村指導者研修プログラム

2013年4月1日～12月7日

研修 報告

training program

教務主任

大柳 由紀子

今年度も神様の豊かな恵みとお導きのうちに、多くの人々に支えられながら 9ヶ月の研修を無事終え、16カ国 31名の卒業生が卒業式を迎えることができましたことを心より感謝申し上げます。

震災から2年9ヶ月。皆様のお支えにより、私たちは着実に復興の歩を進めてまいりました。今年度は研修の最初から新しい教室や食堂、図書室を利用できる最初の年です。夏には男子寮・豚舎も完成し、研修の環境は震災以前と比べても向上し、震災直後を思うと劇的な変化を遂げました。

学びの場としての40周年記念事業

2013年、アジア学院は40周年を迎えました。学生たちにとっては記念すべき年であると同時に、大きな学びの機会を与えられた時でした。40周年の記念式典・シンポジウムに出席するため、50名を超える卒業生たちが学院に集まりました。学生たちは卒業生たちと語り合い、議論をし、学院の学びをコミュニティでの働きにどう生かすかを共に考え、その成功と失敗から学びました。このような機会は全卒業生1241名の中でも唯一今年度の31名のみにも与えられた貴重なものでした。

今年度の学生は授業・農作業はもちろんのこと、「全てにおいて」真剣な傾向があり、特に40周年記念式典・シンポジウムにおいては、学生たちの全面的な協力がなくては乗り切れなかったと思います。前夜祭に主体的に取り組み、ディスカッションを取り仕切り、エンターテインメントで盛り上げました。各卒業生に対し担当の学生がついたことにより、卒業生たちはきちんとしたケアを得、学生たちは卒業生たちから多

く学ぶ機会を得ました。一週間にわたるシンポジウムにおいて、授業外でも様々な場面で交流・議論をもつ姿がみられました。

その約一ヶ月後におこなわれた「収穫感謝の日」は、学生たちのリーダーシップによって成功裏に終わることができました。特にコーディネーターや各委員会のリーダーをつとめた学生たちは、「非常に大きな学びを得られた」と喜んでおりましたが、私たち職員にとっても「学生たちに任せていれば大丈夫」という安心感があったことも事実でした。

自給自足を実践して

学生たちは9ヶ月間、カリキュラム時間にして2061時間にわたって60を超えるトピックを学び、自分たちのコミュニティのために何をなすべきかを探ってきました。震災直後は自給さえできなくなった畑も、今年は70種類4300kgの野菜・作物を自らの手で育てることができました。学生たちは野菜を育て、家畜の管理をし、収穫したものを料理しながらリーダーシップについて学びます。クラスで学んだことを実践する場所が農場やキッチンであることは、学生の中に深く染み付いていきました。

ある学生はアジア学院についてこう表現しました。「私たちの前に川がある。それは貧困、教育の問題、怠惰、利己主義という川だ。NGOの人たちがやってきて、私たちを背負ってその川を渡ろうとする。川を越えることはできるけれど、その人たちは渡り方を教えようとはしない。彼らが帰ってしまうと、私たちはまた川を渡れなくなる。でもアジア学院は違う。私たちがここで学んだのは、その川の渡り方なんだ。」

彼らは確かにたくさんの方を学びました。サーバントリーダーシップ、有機農業の知識と技術、農薬の危険性、参加型農村調査法、畜産学、自然農業、アグロフォレストリー、立体農業、パーマカルチャー、公害問題、都市問題、ローカリゼーション、バイオガスなど。しかし私たちがその根底として伝えたいのは、自分のコミュニティがもつ力に前へ進むことができるということ、自分たちが必要とするものは既に自分たちの地域に存在するという、農村リーダーとはそれを見つけ、人々を励まし、共に働き共に生きる存在であるということでした。学生たちは授業のみならず生活から、農作業から、調理から、互いに仕えあうという学院の生活全般に貫かれた哲学から、そのことを少しずつ学んでいきました。

夢と責任

9ヶ月間、学生たちは母国で待つ何百人という人々のために学んできました。彼らの成し遂げた学びの重さは、2061時間という時間ではなく、60科目という種類ではなく、5000キロに及ぶ研修旅行の距離でも4300kgという収穫量でもなく、学生たち一人ひとりが学院で持つことができた夢の重さなのだと思います。彼らによってそれぞれのコミュニティが、人々が、より良い未来へと進んでいくことを願ってやみません。



(順不同・敬称略)

特別講師

アルデンドウ・チャタジー、小倉恭子、甲斐田満智子、鎌田陽司、桑原衛、小出秀夫、酒匂徹、坂原辰男、スティーブン・カッティング、J・B・フーパー、セラジーン・ロシート、田坂興亜、田村修也、芳賀欣一、村上真平、山田祐彰、那須塩原警察署

見学・交流等、
研修でお世話になった方々

study supporters

農業関連見学・研修先

帰農志塾(有機農業)、ウィンドファミリー農場(有機複合農業)、金子美登・石川宗郎(有機農業)、田下隆一(有機農業)、桑原衛(有機農業・バイオガス)、民間稲作研究所(稲作・自然エネルギー)、佃文夫(自然農法、自家採種)、自由学園農場(酪農)、がらがらどん(ヤギ飼育)、ジョセフィンファーム、関根養魚場

見学先・交流団体

【栃木県】 那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉱毒事件学習(旧松木村跡、足尾製錬所、渡瀬川遊水池)、マ・メゾン光星、西那須野幼稚園、矢板幼稚園、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、黒磯南高校、波立小学校、国際医療福祉大学、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、那須高原教会、矢板教会、塩谷一粒教会、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、鹿沼福音教会、松が峰カトリック教会、松原教会、氏家教会、栃木教会、足利教会、足利東教会、小山教会、泉教会 【東京都】 日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会 【他府県】 渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会(板橋明治)、丸木美術館、ARISA(アジア学院サポーター)各位、各地ロータリークラブ

農村地域研修

【山形県置賜地区】 渡部務・美佐子、原田俊二・加矢乃、菅野芳秀、長井市レインプラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢巖、高島共生塾(遠藤周次)、高島町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、JA山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー(佐藤恵子、原田加矢乃)、川西町役場(原田俊二町長・産業振興課)、しらたかノラの会、米沢興譲教会、草野ハム加工組合、秋津ミチ子、高島ワイナリー、小国町役場(緑のふるさと協力隊) 【山形県戸沢村】 戸沢村役場産業振興課地域づくり推進係、国際交流協会、芳賀欣一、戸沢小学校、乙夜塾 【山形県庄内地区】 加藤鉦一、月山パイロットファーム(相馬一広)、共立社鶴岡生協(佐藤誠一)、志藤正一、JA庄内たがわ営農農政課、庄内教会(矢沢俊彦)、庄内教会保育園、藤岡町農村環境改善センター、庄内協同ファーム、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、鶴岡市立加茂水族館、佐藤昌司、茨新田生産組合、吉田伸一、鶴岡農協西郷支所、有限会社ドリームズファーム 【秋田県仁賀保町】 土田雄一、佐藤喜作、JAにかほ、曹洞宗太白院、都市農村交流センター 【岩手県】 ウレシパモシリ自然農園(酒匂徹)

西日本研修旅行

【東京都】 農村伝道神学校 【静岡県】 聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍 【三重県】 愛農学園高等学校、村上真平 【大阪府】 大阪南YMCA、関西沖縄文庫、NPO金ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク(生田武志)、希望が丘教会 【熊本県】 熊本いのちと土を考える会(高丸和彦)、エコネットみなまた・はんのうれん(大澤菜穂子)、水俣病資料館、吉永理日子(証言者)、ほっとハウス 【広島県】 広島平和記念資料館、梶本淑子(証言者)、スティーブン・リーパー 【群馬県】 栗生楽楽園、碓雄二、群馬・ハンセン病裁判を支援しともに生きる会

カリキュラム

curriculum

有機農業 実習

practical field
study

有機農業、畜産、
食品加工の論理的
および実践的知識の
習得を目的としている

【野菜作物】

ぼかし肥作り、堆肥作り、
土着菌の採取と活用、
天恵緑汁魚のアミノ酸資材
水溶性カルシウム、
炭焼きと木酢作り、
粉殻くん炭、自家採種、
練り床を利用した苗作り

【畜産】

養豚（人工授精、出産、去勢）、
養鶏（育雛、人工ふ化）、養魚、
家畜衛生、飼料配合、
発酵飼料作り、発酵床式畜舎

【肉加工】

ソーセージ、ハム

農場管理 活動

field management
activity

グループによる農場管理（野菜作物栽培および畜産管理）、
フードライフワーク（自給自足のための農作業および
給食準備）、グループリーダーシステム

その他の 研修

others

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈りなど）、内的成長を
促す活動（朝の集会、Growth File、コンサルテーション、
リフレクションペーパー、振り返りの日）、口頭発表、
収穫感謝の日、40周年シンポジウム、国際交流プログラム、
見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行、
ホームステイプログラムなど

【日本語、日本文化】

小倉 恭子*

【指導者論】

アジア学院の指導者論
サーバント・リーダーシップ
アジア学院の歴史と建学の精神
参加型農村調査法
自律学習
プレゼンテーション技術
報告書作成指導
時間管理法
ファシリテーション技術
人間開発論
プロジェクト立案法

大津 健一
荒川 朋子、大柳 由紀子
大津 健一
荒川 朋子、大柳 由紀子
スティーン・カッティング*、大柳 由紀子
大柳 由紀子
デービッド・マッキントッシュ
ティモティ・アパウ
大柳 由紀子
ティモティ・アパウ
セラージーン・ロシート*

【開発論】

ローカライゼーション
環境と開発
栄養概論
共助組合論
アジアの人身売買の問題
那須疎水と西那須野開拓の歴史
足尾銅山鉱毒事件と田中正造
ジェンダー論
開発への代替的アプローチ
気候変動と国際パートナーシップ
開発と日本の歴史

鎌田 陽司*（NPO法人「懐かしい未来」代表）
田坂 興亜*（アジア学院理事）
ザチバル・ラコー
遠藤 抱一
甲斐田 満智子*（国際こども権利センター）
田村 修也*
坂原 辰男*（田中正造大学）
荒川 朋子
J・B・フーバー*
（アジア学院北米後援会 iLEAP代表）
J・B・フーバー*
大柳 由紀子

【持続可能な農業・技術】

野菜・作物概論
持続可能な農業概論
稲作
畜産概論
家畜繁殖
養鶏
養魚
家畜飼料概論
代替技術
農業技術実習

荒川 治、上村 真由
アルデンドウ・チャタジー*
（76年卒業・インド 農業アドバイザー）
荒川 治
ギルバート・ホガング、大谷 崇
ギルバート・ホガング、大谷 崇
ティモティ・アパウ
パン・ヒョンウク
ギルバート・ホガング、大谷 崇
パン・ヒョンウク
荒川 治、上村 真由、ギルバート・ホガング、
ティモティ・アパウ、大谷 崇、パン・ヒョンウク、
大柳 由紀子
荒川 治、上村 真由
ギルバート・ホガング、大谷 崇
山田 祐彰*（東京農工大学講師）
田坂 興亜*（アジア学院理事）
村上 真平*（自然農法家）
酒匂 徹*（有機農家）
大柳 由紀子
荒川 朋子
桑原 衛*（NPOふうど代表）
芳賀 欣一*（戸沢村国際交流協会会長）

作物病害虫管理
家畜病気管理
アグロフォレストリー
化学農業の危険性
熱帯における自然農業
パーマカルチャー
日本の組合の歴史と賀川豊彦
生産者と消費者の提携
バイオガスワークショップ
立体農業の哲学

研修時間総計：2,061 時間

講義 一覧

lectures

*は特別講師

フード ライフ

foodlife

教育部長

荒川 治

野菜 作物

crops &
vegetables

田んぼのヒエを完全にコントロール

2013 年は、学生に任せる田んぼの面積を 60a に増やし、雑草をコントロールするために、いろいろな方法を試しました。竹ぼうき除草、チェーン除草、深水管理、太一車、機械除草、デッキブラシ、手除草、魚水稻同時作、合鴨水稻同時作、緑肥（ヘアリーベッチ）による除草、不耕起水田のマルチなどです。竹ぼうきによる除草は、田植え 5 日後に行いました。竹ぼうきを引かずって田んぼを往復します。2 回目はさらに 1 週間後に竹ぼうきをチェーンにかえて除草をしました。竹ぼうきもチェーンも引かずった後、小さな雑草が無数に浮いてくるのが観察できます。緑肥除草を試みた田んぼは、緑肥の成長が十分ではなく、期待した有機酸による雑草の発芽や成長抑制の効果がなく、学生は汗水流して手で除草しました。

みんなで努力したかいあって、毎年苦しめられていたヒエは合鴨も食べてくれなかったのですが、今年は、ほとんど 100% 抑えることができました。いつもは夏の暑い時期に、田んぼで腰を痛めながらヒエ取りをするのです。今年、ヒエを完全に攻略できたのは、やはり深水管理だったように思います。田植え後、30 日間 7cm 以上の深水管理を徹底しました。

学生の国では、日本とは条件が違うため、学院で成功した方法もうまくいかない場合が多いです。深水管理をしようにも水をコントロールするのが困難な場所がほとんどです。また、一年に 2 回も 3 回も稲を育てるため、雑草が問題にならない場所もあります。学院としては、できるだけ多くの方法を紹介し、少しでも学生が地域資源を利用して、有機農業を実践できればと考えています。竹ぼうきやチェーン除草は彼らの国でも有効な手段だと思えます。

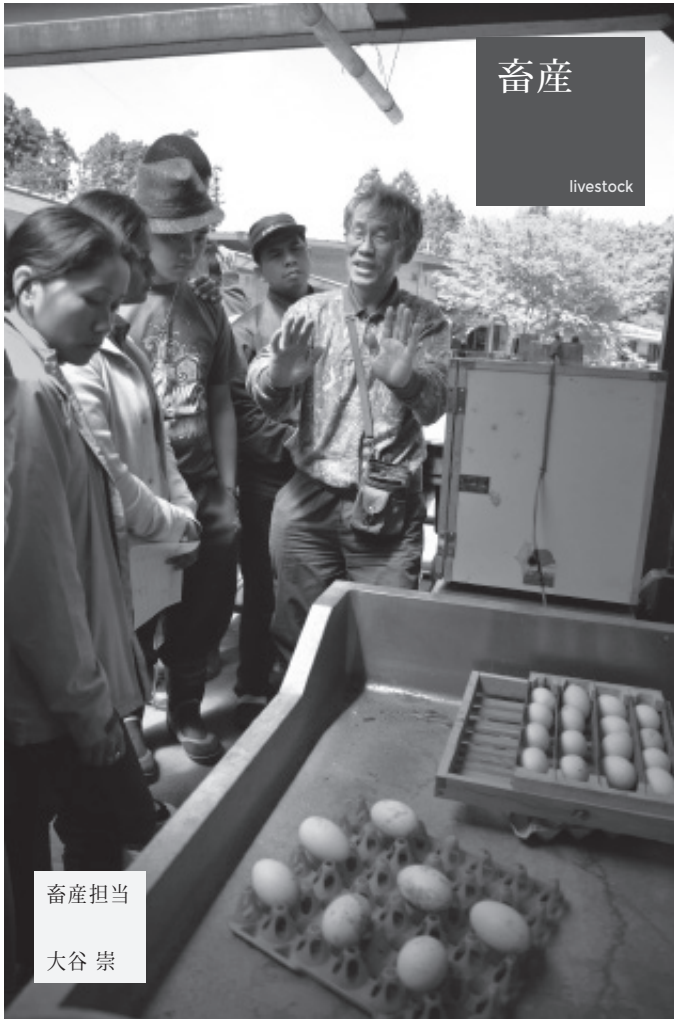
SVO (Straight Vegetable Oil) の実験

また、原発事故後、特に日本では再生エネルギーへの関心が高まりました。開発によって便利になるのは悪いことではありませんが、それが持続可能でなければ意味がありません。その便利さは、子供や孫や次の世代の安全な空気や水、土や食べもの、そしていのちを奪うものであるかもしれません。学院の土も未だに高いところでは 1200Bq/kg あります。環境を破壊せず、すべての人を受け取ることができる持続可能で充実したライフスタイルをどう発信していくことができるか、学生が真剣に考えました。特に、冬には日本人卒業生とともに、SVO (Straight Vegetable Oil) の実験を行いました。ディーゼル発電機に SVO 投入パイプを取り付け、使用済み天ぷら油などの廃油を集め沈殿させた後、フィルターに通したものを SVO として使用し発電することに成功したのは大きな収穫でした。SVO による発電で大豆の乾燥機や搾油機を稼動し、大豆油や油かすを生産する予定です。

食糧油の自給と家畜飼料の自給

この他、昨年度始まった搾油は、大豆、黒大豆、ひまわり、菜種から合計 225.4kg の油を絞ることができました。これは食堂の一年間の油を





畜産

livestock

畜産担当

大谷 崇

養豚部門

【新しい豚舎の追加】 震災でダメージを受けた旧豚舎に代わる新しい豚舎が完成しました。自然養豚の考えに基づき、おがくずを利用した発酵床と通気性を重視した屋根の構造が特徴です。いままで分散していた母豚舎と分娩舎・肥育舎が全て一箇所に集まり管理も非常にラクになりました。あわせてバイオガスプラントの建設も進行中で、このためコンクリート床式の豚房も3部屋残しました。明るく快適な新しい豚舎は養豚特有の匂いも全く感じさせず、豚たちものびのびと走り回っています。

【肉加工エクス】 長年アジア学院の豚肉を使って手作りソーセージの加工・販売を行っているノイフランク（那須町）の小出氏を講師として迎えました。

小出氏からは屠畜したばかりの骨を抜いただけの肉から、どの部位がどの様な調理方法に適しているのか、どの様に解体したら良いのか、詳細な解説がありました。また出来るだけ機械を使わず、安価で代用可能な道具を使うソーセージの作り方も教えていただきました。

家畜飼育を始めようと思っている学生や、家畜飼育はしているけれども、商品に付加価値をつけて差別化し、収入源としてコミュニティの手助けがしたいと考えている学生にとっては大きな学びとなったようです。

【豚出荷方法の変更】 ウィンドファミリー農場（市貝町）の養豚の縮小に伴い、これまでお願いしていた屠場への出荷・引き取りや豚肉のパック詰めの方法を変更しました。出荷は直接屠場に持ち込むようになり、引き取りやパック詰めは地元の精肉店をお願いすることになりました。ウィンドファミリー農場には、長年に渡り養豚に限らずさまざまなご指導をいただきました。心より御礼申し上げます。

養魚部門

自給用として鯉を飼育しています。鯉は劣悪な環境でも良く育つだけでなく、水田養鯉により水田の除草の役割を担っています。

育成・繁殖期においても購入飼料に依存せず、スーパーなどから頂く魚のアラなどを中心に混合ペレットに加工して使用しています。ペレットの利点は長期保存が容易であり、水に溶けにくいので池の水を汚す心配がありません。稚魚用のほか、魚の大きさに応じて計3種類のペレットを作っています。

冬になると養魚池が凍結するため、鯉は休眠状態に入りエサも食べません。そのため食卓に上がるまで3年の長い月日がかかりますが、その分の愛を受けて育ったからこそコミュニティメンバーに人気の食材の一つです。

養鶏部門

【鶏舎の改造の計画】 徐々に改造・増築が続けられてきた鶏舎は老朽化の問題だけでなく、構造が複雑になったため放射能の除染が難しく、また過度に仕切られているため鶏にもストレスを与えていました。このため傷んだ部分を修復すると同時に屋根材を交換して除染をし、かつ雨や落ち葉が鶏舎内に溜まらずに排水溝に流れ込むようにします。また鶏舎内の仕切りを除去して、自然養鶏の目安とされる一坪当たりの鶏を10羽以下を目指しストレスの少ない飼育環境を作ります。

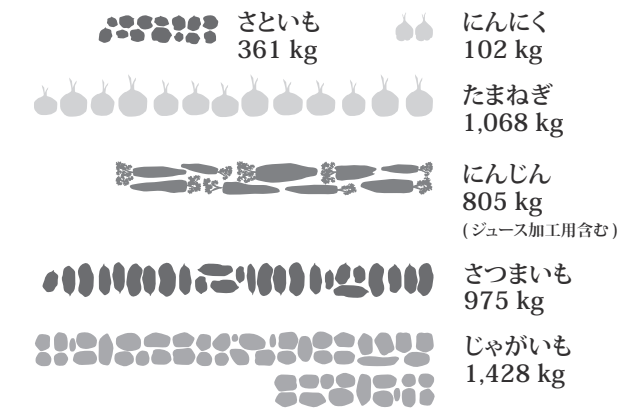
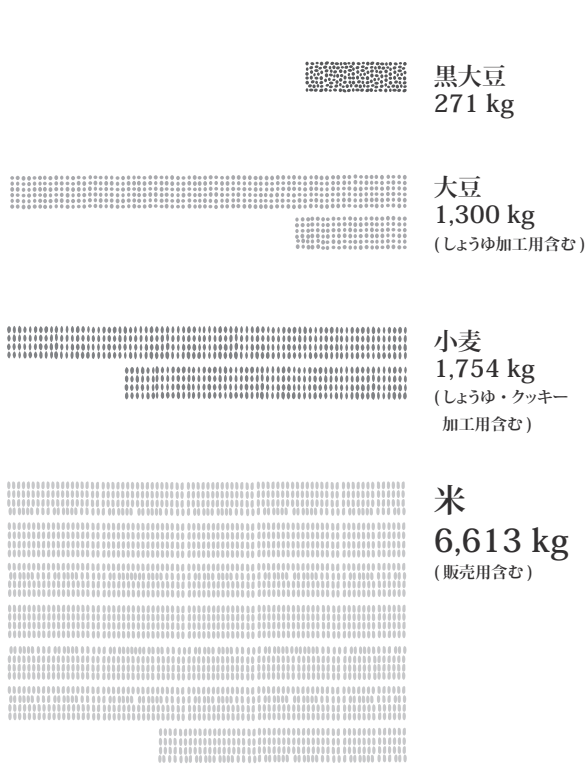
自給飼料の向上への取り組み

冬季の粗飼料確保を目的として、収穫したデントコーンをサイレージに利用していました。しかしF1品種のため毎年種子を購入せざるを得ず、また予め種子消毒がされていました。これをアフリカ由来のホワイトコーンに変更し、それを自家採種したので、種苗費の軽減につながりました。

疾病予防

近年、家畜の伝染病は国境を越えて広がりを見せるようになりました。アジア学院では薬品や添加剤に頼らず、健康的でストレスに強い家畜を育てるように努めていますが、外部からの伝染病侵入の可能性はゼロではありません。リスクを少しでも低減すべく「家畜伝染病予防ガイドライン」を定め、畜産部門で作業される全ての方々にご協力をお願いすることになりました。このガイドラインは家畜伝染病予防法に基づく飼養衛生管理基準に準じています。主な内容としては以下の通りです。

「①過去一週間以内に国外から入国した者は原則畜舎に立ち入らない②過去四ヶ月以内に海外で使用した衣服及び靴を畜舎内に持ち込まない③農場の入り口及び畜舎の入り口に消毒ポイントを設ける」



livestock 家畜



給食
meal service

私は給食コーディネーターになるために、2012年2月の寒い日にアジア学院にきました。私が新築されたコイノニアと農業研修棟を見たとき、私にとって親しみを覚えていた場所はなくなっていたように思いました。多くの変化がありました。私には古いものがなくなったという思いと、よそ者のような感じがしました。ただ以前からのスタッフに会ったとき、古いアジア学院キャンパスを思い出しました。

新しい厨房に入り、そこにある新しいものを見ながらしばらく自信をなくしたように感じました。また、保健所が新しい厨房で料理する人々に対して以前よりも厳しい規則を課していて、私は神経質になりました。私を驚かせたもう一つのことは、厨房と食堂を行き来する出入口がないことでした。毎回食堂から厨房へ行きたいと思っても、食堂を出て厨房の外側を通って行く方法しかありません。皆にとっても新しいシステムに慣れるには困難があったと思います。新しくなった建物と共にもう一つの変化は、以前は古いコイノニアでアジア学院の井戸水だけを使っていましたが、今は市の上水道を合わせて使うように求められています。

現在のコイノニアでは、96人が食事することができます。もし12テーブルを使うなら、各テーブルあたり8人が坐れます。古いコイノニアと比べると、より広いスペースがあります。私たちが40周年記念事業の計画を立てたとき、私は食べる場所に気を使いました。10日間の間にアジア学院で毎日食べる人は、9月16日の創立記念式の日を除いて110人でした。16日の昼食時には、約250人の人々が一緒に食事をしました。幸運にも何の問題もなくすべての人を迎え入れることが出来ました。



コーディネーター
ザチボル・ラコー

40周年のプログラムと収穫感謝の日の間には、3週間の間隔しかあいておらず、この間の私の心配は食糧でした。この期間農場からのお米や野菜の供給について不足がなかったことは幸いでした。私たちは、給食提供において実質的に自給を達成することが出来、また給食の本当の意味や価値を体験しました。2013年4月から2014年3月までの間に約45,889食を提供しました。私たちは、毎年のトレーニングプログラムで実践していることですが、私たちのコミュニティメンバーに農作物や肉を提供することが出来ました。特に本年の学生は、例年より多くの野菜を作らねばなりませんでした。彼らが、全体のマネジメントを考えながら野菜作りをしたことによって2つの行事の間に野菜がなくなるようなことはありませんでした。畑の準備をするところからテーブルを囲んで自分たちで料理した食べものを分かち合うまでのすべてが喜びでした。これは、「共に生きるために」というアジア学院スピリットを実践する中で、毎年アジア学院でなしているユニークな事柄の一つであると言えます。

共同体生活
コーディネーター

ジョナサン・
マッカーリー



共同体 生活

community life

2013年度の共同体生活の委員は7人です。宣教師のジョナサン・マッカーリーがコーディネーターで、委員は宣教師のバン・ヒョンウクとティモティ・アパウです。二人は農作業の仕事も担当しています。そしてマッカーリー・里美とジョン・チンへ、それに男子寮担当のビャ・サムイエ（研究科生）と女子寮担当のザチボル・ラコーが委員です。私たち7人は毎月第一水曜日に集まって最近のイベントや問題を話しあったり、次のプログラムを作ったり、学院とお互いのために祈り合ったりしました。また毎週金曜日に5人の宣教師が集まってアジア学院のための祈り会をもっていますが、それは今年で5年続いています。

私たちの一番大事な仕事は、学生やボランティアや職員と一緒にいて話を聞いたり、祈ったりすることです。私たちの定例の仕事は、毎朝の掃除当番や皿洗いの順番を決めることやコイノニアの片付けをすること、忘れ物の確認をしたり、教会の日曜礼拝に連れて行ったりすることです。また総務と連携して、具合の悪い学生やボランティアを病院に連れて行っ



て通訳したり、国内事業課と一緒に外国からの来客との連絡や送り迎えをしたりしました。またアジア学院の共同体が元気に交わり学ぶために、夕方に行われる集まりを助けたり、宣伝したりしました。これらの集まりには、祈り会、“MINNGOS”のゴスペルや他の音楽グループ、英会話、Lectio Divina（聖書研究）、農業関連の勉強会などがありました。

毎月の定例イベントは次の通りです。西那須野教会のアジア学院サンデー（日曜日）、諸宗教ダイアログ、ムービーナイト（映画上映会）、学院共同体のイベント、ボランティアの集まり。また寮の担当の2人は毎月の寮の大掃除とパーティや話し合いの時間をもちました。またよく地域のコンサートや国際交流会にも参加し、地域とのつながりを大切にしました。

2013年度は総務や教務、国内事業課と一緒に以下のイベントを準備し、宣伝しました。釣りの日、オープンダイアログ、ホームステイプログラム、国際医療福祉大学との交流、障がいのある子供たちとの交わり等です。またバン宣教師が、アジア学院と栃木県の教会をつなげる役割を担いました。5月から9月にかけて20以上の教会でアジア学院サンデーを行いました。さらにゴスペルワークショップやコンサートを行ったり、地元の祭りに参加したりして、共同体が楽しく一つになれるよう行動しました。

2013年度は異文化の問題やコミュニケーションの問題がありました。互いにどうやって理解しあい、また和解を望んで共に生きることを選ぶことがどれほど難しいかを感じました。それでも2013年度の共同体がともに最後まで歩み、違いを乗り越えていけたことを感謝しています。9ヶ月間は短いように思われるけれど、アジア学院の共同体生活の委員会として本当に忙しくて楽しい9ヶ月であったと思います。

卒業生 活動

graduate activities

シンポジウムを準備し、ここで卒業生・サポーターよりアジア学院の将来に関する多くの提案をもらった。また卒業生とその同伴者の航空券の手配、空港への送迎、宿泊場所のアレンジなどをした。

学生募集

2014年度研修のための学生募集は2013年の初頭に始め、2013年8月まで続けた。47名の研修申込があり、9月に選考を始めた。選考は10月末に終わり、海外より28名の学生を招くことを決めたが、ウガンダ人の学生1名にビザがおりなかったため、彼を除いた27名の学生を海外より、国内からは在日韓国人の学生1名を、2014年3月末に受け入れた。

Graduate Reports 2013



タンザニア) ローズ・シワラ・マトウ
1996年卒

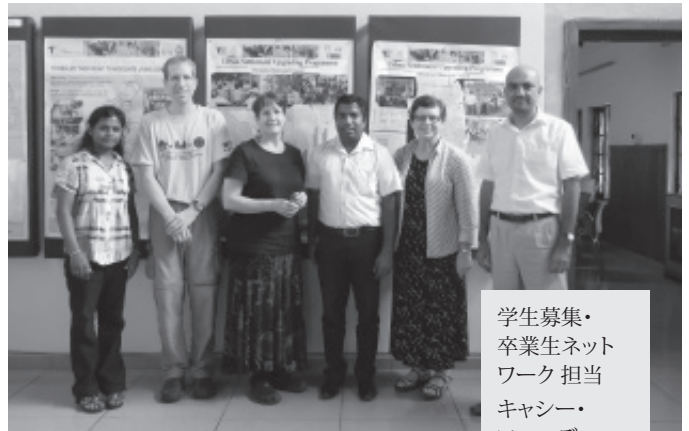
ローズはかつてセンゲレマ民間開発大学で校長を務めていました。2009年に退職した後は、地元地域の活動により深く関わる時間を持ち、貯蓄・融資協同組合(SACCOS)のために小さなグループをたくさん組織してきました。

ローズはまた2001年に開設したラジオ・センゲレマ・テレセンターの理事でもあります。このラジオセンターは積極的に農村地域に情報を広め、現在、約500万人の人たちが聴いています。ラジオは1日19時間英語とスワヒリ語で放送され、地域のイベント情報は地元の方言が使用されます。

水質保全や保健(HIV/AIDSを含む)、環境など特定のテーマを放送する時は、リスナーが電話で参加をする機会も与えられています。農業番組で特に関心を持たれているのは天気や作付け条件、現行市場価格などの内容です。

創立40周年記念事業

全卒業生に1週間に亘る記念プログラムの招待状を送った。そのうち100人以上の卒業生とコミュニケーションをとり、出席の返事をいただいた約60名の卒業生及び同伴者に対してビザ申請のための書類を整えた。2日間に亘るシ



学生募集・
卒業生ネット
ワーク担当
キャシー・
フローディ

卒業生とのコンタクト

2013年度は“NETWORK Graduate Bulletin”を12月の創立40周年記念号を含めて2回発行した。また、e-mailで卒業生へ5回季節の挨拶メールを送り、卒業生からの質問や要望にも応えた。2013年度中にフィリピン、スリランカ、ミャンマーで同窓会が開催された。またキャシー・フローディが、スリランカでの同窓会に出席し、その機会にスリランカ国内の他の卒業生を訪問、27名の卒業生に会うことができた。



スリランカ) ニシャーント・グナラトネ
2012年卒

スリランカ北部では、2012年の卒業生ニシャーント・グナラトネが新しい命の種をまいています。彼が働く場所は30年間の内戦で破壊された施設で、その名もナヴァジーヴァナム「新しい命」です。この場所は以前、メソジスト教会所有の土地にある農場兼孤児院兼教会関係者の宿泊施設でした。ニシャーントがここへやって来た時、建物は破壊され雑草に覆われていました。地元の人たちの手を借りて瓦礫を取り払った後、小さな学校の校舎とゲストハウスが建直されました。

当初、この地に居住経験のないシンハラ人である彼が、タミール人の住む地域に地元住民を手伝うために来たと思われていた。時間が経つにつれて、タミール語を勉強し、保育園や女性グループの支援など地域に仕え、住民と肩を並べて働くうちに、ニシャーントはコミュニティーの一員として受け入れられるようになりました。



国内 事業

domestic business

セールス

販売部では、安全な「食」を求める方や支援者の方を対象に学院内で採れた食物を分かち合うことを通し、収入創出活動を行っています。米やエゴマなどは収穫量が伸び悩み、販売量は前年度の半分となりましたが、2013年度全体としては例年通りの売上高を達成することができました。豚肉やコーヒー、卵については定期的にとまった量をご注文くださる個人や団体の方を対象に、またクッキーやジャム、お醤油などは主にバザーなどの機会を通して販売いたしました。震災から3年目となる2013年度は、アジア学院を訪れるお客様の数も多く、お土産購入の場として、また日常のお買い物の場として学院内のお店をご利用いただきました。日常の販売活動では、特に通いボランティアのお手伝いを得ることができ、発送物の梱包や取引店への配達など、前年度よりスムーズに遂行することができました。

また、生産過剰となった生産物や40周年記念事業で制作した記念品等の売上を寄付として利用いたしました。学生のいない1月から3月に供給過剰となった卵は、社会福祉法人や生活保護を受けている世帯に食糧を供給するNPO法人フードバンクに2,180個(58,000円相当)を寄付しました。また、40周年のTシャツの売上の一部(54,900円)を台風被災地であるフィリピンのレイテ島で活動する卒業生に寄付いたしました。

アジア学院内イベント(40周年/HTC/西日本キャラバン等8件)、委託販売(11教会)も含め94の特別な販売機会を得ました。外部への出張分としてはARIサンデーなど教会関係41件、大日向マルシェ(那須町)10件の他、東京や地元のフェスティバルなどに来店いたしました。

アジア学院の農場で採れた食べ物を分かち合うことで、また卒業生の作品を手にとることによって、より多くの方がアジア学院を身近に感じられるよう、努めています。

アジア学院でのイベント

5月 イングリッシュファーム『持続可能なくらし〜輪の中にくらす〜』

アジア学院の大切にしているフードライフを英語で体験する3日間。今回のテーマは『お米』。アメリカ人ボランティアと共に田植え前の田んぼに入り、“畦ぬり”や“わらじ作り”に取り組みました。

2月 イングリッシュバイブルキャンプ『持続可能なくらし〜聖書にはどう書いてあるの?〜』

初めて農業体験と聖書の学びのできるキャンプを企画しました。大雪にもかかわらず7名の参加者があり、アメリカ人宣教師やボランティアの協力のもと、アイスブレイクや聖書の学びなどを行う他、フードライフ体験もあり、充実した3日間となりました。

6月、3月 古本・古着市

恒例の古本市は那須セミナーハウスの落ち着いた雰囲気の中開催されています。2013年度は古着の販売も始め、来場された方がゆったりと過ごせるように、ミニカフェコーナーを設け、アジア学院のコーヒーやクッキーが販売されました。

アジア学院外でのイベント

11月 西日本キャラバン(出張報告会ツアー)の実施

今年は18日間にわたり、『このグローバルな時代だからこそ考えたい!〜オルタナティブな"もう一つの"生き方〜』をテーマに西日本各地59か所でのトークセッションや授業、訪問等をさせて頂きました。

2月 ネパールスタディツアー《2月12日~25日(12泊14日)》

8名の参加者と共に、今年は『タライ平野における農奴解放運動の取組と卒業生』というテーマの元、ネパールを訪問しました。現地調整員として藤井牧人(2004年度卒)、学院引率として山下崇が同行。農奴解放運動を行っている団体BASEを中心に、カワソティ(04年度卒藤井牧人、ティル)、トゥルシプル(95年度卒シャニ、98年度卒シャンタ、10年度卒スニータ、11年度卒アカシュ、13年度卒カルパナ)、ナランガード(05年度卒ラトナ)、カトマンドゥ(アジア学院卒業生同窓会開催、09年度卒ロシャニ)を訪問しました。

Best-selling ARI goods 2013 アジア学院商品セールスランキング

No.1

豚肉



No.2

クッキー



No.3

たまご



No.4

コーヒー



No.5

醤油



那須セミナーハウス

ワーキングビジター

震災後女子寮の改修が先に行われましたが、2013年の7月には男子寮が新築されました。快適で楽しい寮生活を送れるようになりました。

参加人数 74人

アジア学院キャンプ

これまでのキャンプのプログラムを再検討し、アメリカ人ボランティアによる英語でキャンパスツアーを行うことや、インド人職員によるインドカレー教室などを新たに行いました。参加アンケートの総合評価で

は9割以上の方が“非常に満足”という評価を頂きました。

参加団体 30組 参加者 313人

キャンプ 参加団体

camper groups

イングリッシュファームキャンプ、宇都宮大学(友松ゼミ)、St.Olaf大学、ICU高校、学生キリスト教友愛会、国際基督教大学、足利東教会、代田教会、新島学園高校、共愛学園高校、松原教会、立教大学(甲斐田ゼミ)、那須塩原市国際交流協会中学生キャンプ、立教大学YMC A、中央大学 YMCA、藤沢カトリック教会、勝山学園、明治大学(寺田ゼミ)、新島学園短期大学、同志社大ヒタット、ウェスリーセンター、40周年ゲスト、アジア学院卒業生、HTC ボランティア、ルーテル学院大学(上村ゼミ)、国際基督教大学宗務部、イングリッシュハイブルキャンプ 他

アジア学院 サポーター の会

arisa

6月 アジア学院サポーターの 集い (ARISA)

第1回アジア学院サポーターの集い(ARISA)が6月29日(土)に開催され、39名の参加者、アジア学院の学生代表(2名)と共に、収穫感謝の日のARISA

バザー、40周年の前夜祭について話し合われました。

アジア学院後援会からの組織変更から1年半。これまでの会費は毎年・毎月継続寄付(マンスリー・イヤリーサポーター)としてアジア学院で管理をし、寄付をして下さった方が確定申告の際に寄付控除を受けることができるようになりました。

10月 収穫感謝の日 (HTC) ARISA バザー

「チャリティオークションをしてみませんか?」「当日手伝えます!」6月のアジア学院サポーターの集いで様々なアイデアや心強い声があげられ、今年は初めてチャリティオークションが行われました。『あなたの買い物が未来の農村リーダーをサポート!』というスローガンがバザー会場に掲げられ、恒例のバナナトロン、サツマフライ、魚の塩焼きなどと共に売上を伸ばし、アジア学院学生の奨学金のための収益は2009年度以来最高の842,825円となりました。



アジア学院 北米後援会

american friends
of asian rural institute

AFARI とは、北米各地に住んでおられる約400名からなるアジア学院サポーターの会です。創立された1983年以来、指導者養成コースおよび研修生を支えるべく、毎年献金・奨学金を送って下さっています。AFARI 会員の多くは、過去にボランティアとしてアジア学院に来られた、あるいは宣教師として日本で時間を過ごされた方々ですが、出版物を読んだこと、あるいはアジア学院のスタッフ・卒業生との出会いをきっかけにサポーターとなって下さった方も少なくありません。2013年度は、金銭的支援に加え、理事4名を含む会員9名が40周年記念式典に合わせてアジア学院を訪れ、研修生・卒業生・スタッフなどと豊かな交流を持ちました。またアジア学院の過去を振り返るだけでなく、今後の展望について私たちと共に考えて下さいました。AFARI は、2013年度に新たな機能を備えたデータベースを導入し、これを共用するアジア学院の情報管理・発信もより効果的かつタイムリーとなることが期待されます。

訪問団体・ ホスト ファミリー名

caravan supporters

【愛知県】(教)中京教会、名古屋オールセントインターナショナル教会、名古屋ユニオン教会、伊藤幸慶、壁谷早苗、中村満・真紀子 【岐阜県】 御嵩町役場、永谷嘉規・香、大垣市内キリスト信徒会、歩みの里、山信彦、堀江法夫 【滋賀県】 近江兄弟学園高等学校、近江兄弟社、近江兄弟病院、アシュラム 【大阪府】 大阪女学院大学、プール学院高等学校(教)豊中教会、ぐるりの家 竹之下萌愛 【京都府】 同志社大学、バザールカフェ、(教)同志社教会 【奈良県】 古民家ろっきゃお、(教)吐田郷教会、長田操 【兵庫県】 啓明学院中高等学校、関西学院大学、神戸ユニオン教会、(教)宝塚教会、(ル)宝塚教会、(教)神戸栄光教会、(教)甲東教会、(教)神戸雲内教会、Peace & Nature shop、天国屋カフェ、本岡昌明・節子、シャクルトン・マイケル 【高知県】 清和女子学院、井澤啓 【徳島県】 日下星乃 【広島県】 広島女学院大学、広島工業大学、(バ)広島平和キリスト教会、(教)広島教会、(教)広島牛田教会、むさび農園 北原六地・佳代 【岡山県】 山口敦史 【静岡県】 石田あやこ

アジア学院の コミュニティ メンバー

community
members

職員

名誉学院長

高見 敏弘

専任職員

大津 健一	校長
荒川 朋子	事務局長・副校長
荒川 治	教育部長・農場長
大柳 由紀子	教務主任
バン・ヒョンウク	共同体生活
ティモティ・B・アバウ	共同体生活
ジョナサン・マッカーリー	共同体生活
デービッド・マッキントッシュ	国際協力
ギルバート・ホガング	畜産
上村 真由	野菜・作物
大谷 崇	畜産
ザチボル・ラコー	国際協力・給食
キャシー・フローディ	学生選考
佐久間 郁	募金・国内事業課長
佐藤 裕美	販売・庶務
藤嶋 トーマス 逸生	広報
山下 崇	那須セミナーハウス主事

非常勤職員

君嶋 満恵	会計
田中 順子	図書
直井 由美子	給食
福島 昌代	食品加工

嘱託職員

遠藤 抱一	法人財務室長
-------	--------

理事長

大津 健一	アジア農村指導者養成専門学校校長
-------	------------------

副理事長

遠藤 抱一	アジア学院 法人財務室長
-------	--------------

理事

福田 龍介	東京ユニオンチャーチ役員
興石 勇	前日本キリスト教協議会議長・ 日本聖公会志木聖母教会司祭
門脇 英晴	(株)日本総合研究所特別顧問
久世 了	前(学)明治学院学院長
星野 正興	日本基督教団松崎教会牧師
佐藤 範明	読売新聞那須塩原支局担当
田坂 興亜	元アジア学院 理事長・校長
飯沼 淳子	那須友の会

監事

大屋 秀之	矢板学園矢板幼稚園事務長
渋井 正明	元(株)渡辺美智雄経営センター部長

興石 勇

前日本キリスト教協議会議長・
日本聖公会志木聖母教会司祭

福田 龍介

東京ユニオンチャーチ役員

久世 了

前(学)明治学院学院長

星野 正興

日本基督教団松崎教会牧師

門脇 英晴

(株)日本総合研究所特別顧問

山根 正彦

(学)香川栄養学園理事・総務部長

菊地 功

カトリック新潟教区司教

福本 光夫

(学)西那須野学園理事長・(社福)しらゆり会理事長

宮崎 幸雄

(財)日本YMCA 同盟名誉主事

山本 俊正

(学)関西学院大学教授

李 秀夫

(株)インテック代表取締役

菅野 勝久

日本基督教団西那須野教会牧師

飯沼 淳子

那須友の会

山口 和枝

全国友の会中央部

石川 宗朗

霜里農場

長嶋 清

元アジア学院職員

米田 ミチル

聖母訪問会総長

荒川 朋子

副校長・事務局長

遠藤 抱一

法人財務室長

荒川 治

教育部長・農場長

佐久間 郁

募金・国内事業課長

役員

評議員

ボラン ティア

長期ボランティア

レイチェル・ブラー	国際協力
ジェニファ・ナイト	給食
ダグレス・ナイト	農場
ケリ・シェイファ	学生選考
阿部 久	農場
川田 継夫	農場
畠澤 明枝	総務
小嶋 歩	国内事業部
サンア・グ	給食・農場
ソレン・ラスムーセン	農場
河本 直樹	農場・給食
三輪 恵愛	農場・総務
カタリナ・ヴァララフェン	給食

ジェス・ルジカ
ショーン・ブラウン
アリス・マール
ターナー・リッチー
メリー・エリザベス・
ガストン

通いのボランティア

伏見 卓
戸川 勝安
小野崎 仁
戸川 昌子
高村 京子
鈴木 由美
長瀬 みか
チョン・チンヘ
マッカーリー 里美

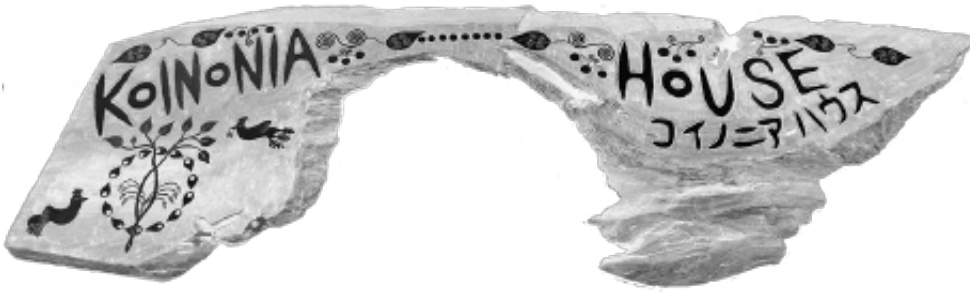
給食
農場
学生選考
学生選考
卒業生ネットワーク

営繕
野菜・作物(油絞り)
野菜・作物
販売
国内事業・給食
国内事業
図書
共同体生活
共同体生活

伊藤 正
加藤 篤彦
佐原 市郎
久保 瞳
青山 登志彦
安田 修平
平山 隆
藤本 和子
川村 麦
林田 綾子
児玉 尚子
阿久津 県治
木村 裕子
渡邊 剛
塚本 和史
田中 正己
矢嶋 由紀子

国内事業
営繕
国内事業
給食
営繕(車輛修繕)
畜産
営繕
給食
給食
総務
野菜・作物
野菜・作物
給食・学生選考、総務
野菜・作物
給食
野菜・作物(油絞り)
翻訳





支援者・ 支援団体 一覧

donors

(10万円以上の寄付)

国内

教会関係

- ウェスト東京ユニオンチャーチ
- 神戸ユニオンチャーチ
- 国際基督教大学教会
- 東京ユニオンチャーチ
- 日本ナザレン教団
- (カ) 援助修道会
- (カ) 大田原教会
- (カ) 藤沢教会ラテンアメリカ共同体・救急の会
- (教) 阿佐ヶ谷教会
- (教) 甲東教会
- (教) 全国教会婦人会連合
- (教) 西那須野教会
- (教) ひばりが丘教会
- (教) 代々木上原教会
- (公) 聖アンデレ教会
- (公) 聖オルバン教会
- (公) 東京教区事務所
- (公) 東京聖三一教会

学校

- 栃木県立宇都宮北高等学校
- (学) 青山学院中高等部
- (学) 共愛学園中学校・高等学校
- (学) さつき幼稚園
- (学) 女子学院
- (学) 清和学園 清和女子中高等学校
- (学) 同志社大学
- (学) 東洋英和女学院中高等部
- (学) 明治学院
- (学) 明治学院中学校・東村山高校
- (学) 立教女学院

諸団体

- IKE 設計開発事務所
- アジア婦人友好会
- 一般社団法人 IBS 社団
- インド卯月会
- 小山友の会
- 草の根ネット麦の会
- 全国友の会中央部
- 東京霞ヶ関ライオンズクラブ
- 東京南口ロータリークラブ
- 日本キリスト教協議会
- 横浜友の会
- ワールドファミリー基金
- わかちあいプロジェクト
- (医社) サマリヤ会
- (株) こぐま社
- (株) 鳥ネットワーク
- (公財) ウェスレー財団
- (公財) 全国友の会振興財団
- (社) スコーレ家庭教育振興協会
- (特活) WE21 ジャパンたま
- (特活) 木野環境
- (特活) 国際協力 NGO センター

奨学金

- アジア農村交流協会
- 一般社団法人 IBS 社団
- 公益社団法人栃木県経済同友会
- 日本基督教団国際関係委員会
- 日本福音ルーテル社団
- (カ) 聖コロンバン会
- (カ) 聖心会 (あけの星修道院)
- (財) 大阪コミュニティ財団
- (財) 地球市民財団
- (財) 新倉会
- (社) 東京アメリカンクラブ
- 東京聖テモテ奉仕奨学金委員会
- 公益信託久保田豊基金
- (財) ロータリー米山記念奨学会
- 日本学生支援機構 (JASSO)
- (公) ウェスレー財団

海外

教会関係

- 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
Global Ministries of the United Church of Christ and the Christian Church (Disciples of Church) - Common Global Ministry Board
- カナダ合同教会 The United Church of Canada

諸団体

- アジア学院北米後援会 (AFARI)

奨学金

- 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
Global Ministries of the United Church of Christ and the Christian Church (Disciples of Church) - Common Global Ministry Board
- The Hartstra Foundation (オランダ)
- 合同メソジスト教会世界宣教 The United Methodist Church - General Board for Global Ministries
- アメリカ福音ルーテル教会 Evangelical Lutheran Church of America
- アメリカ合衆国長老教会 The Presbyterian Church in the USA

災害復興募金

- アメリカ合衆国長老教会 The Presbyterian Church in the USA
- 合同メソジスト教会救援委員会 The United Methodist Committee on Relief
- アメリカ福音ルーテル教会 Evangelical Lutheran Church of America

研究助成

- 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
Global Ministries of the United Church of Christ and the Christian Church (Disciples of Church) - Common Global Ministry Board
- フェッツァー研究所 Fetzer Institute

消費収支 計算書

statement of
financial activities

2013/4/1
～2014/3/31

会計 報告

finances

消費収入の部

(単位：円)

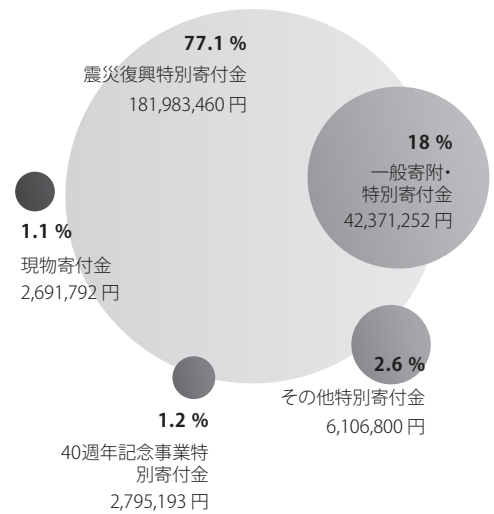
	2013年予算	2013年決算	2014年予算
学生生徒等納付金 (*1)	32,205,600	29,434,565	35,742,539
授業料	3,861,000	3,777,600	3,084,750
入学金	225,000	322,000	125,000
食事費	1,113,000	1,235,000	843,000
施設設備資金	1,113,000	949,000	843,000
国内団体学費指定寄付金	15,608,000	11,184,000	16,332,000
海外団体学費指定寄付金	10,055,600	11,659,748	11,660,000
渡航費	230,000	307,217	2,854,789
手数料	32,000	10,000	12,000
寄付金	191,770,000	235,948,497	112,620,000
国内国外一般寄付金	46,520,000	42,371,252	46,620,000
現物寄付金	0	2,691,792	0
40周年記念事業特別寄付金	5,000,000	2,795,193	0
特別寄付金	140,250,000	188,090,260	66,000,000
(内災害復旧特別寄付金)	(135,250,000)	(181,983,460)	(61,000,000)
補助金 (*2)	12,314,500	7,386,616	6,100,000
資産運用収入	2,142,000	2,221,986	1,050,000
受取利息・配当金	70,000	86,121	50,000
施設設備利用料	2,072,000	2,135,865	1,000,000
補助活動収入 (*3)	27,620,000	23,233,317	24,379,060
雑収入	855,000	15,316,469	855,000
帰属収入合計	266,939,100	313,551,450	180,758,599
基本金組入合計	0	-140,071,672	-47,000,000
消費収入の部合計	266,939,100	173,479,778	133,758,599

消費支出の部 (*4)

人件費	68,411,224	69,260,477	67,864,680
教育研究費	19,795,385	23,927,644	25,482,551
管理経費	76,745,500	67,241,537	62,490,683
(災害復旧費)	(21,030,000)	(14,943,009)	(10,610,000)
(減価償却額)	(27,000,000)	(27,771,920)	0
借入金等利息	1,037,400	1,288,888	1,878,000
資産処分差額	0	113,271	0
有価証券処分差額	0	0	0
予備費	6,000,000	0	6,000,000
消費支出の部合計	171,989,509	161,831,817	163,715,914
当年度消費収入超過額	94,949,591	11,647,961	-29,957,315
前年度繰り越し消費支出超過額	71,330,602	71,330,602	0
翌年度繰り越し消費収入超過額	23,618,989	0	0
翌年度繰り越し消費支出超過額	0	59,682,641	-29,957,315

寄付金の種類別割合

合計 235,948,497円



【注記】

- (*1) 学生納付金には次のものが含まれる。
 ・入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの
 ・食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの
 ・施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの
- (*2) 災害復旧補助金及び再生エネルギー熱利用加速化支援対策事業助成金を含む
- (*3) 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。
- (*4) 2013年度消費支出の内訳については、右頁を参照。

農産物の流通

学院の農場の生産物は食材及び加工食品の材料としても用いられているほか、補助活動として販売される。主な農産物の生産量は、米 6.6トン、小麦 1.7トン、芋類 2.7トン、豆類 1.97トン、タマネギとニンニク 1.1トン、

にんじん 0.8トン、豚肉 36頭、鶏 359羽、卵 70,000個、魚 30kgである。これらの農産物の総額は約 1,680万円である。

貸借 対照表

statement of
financial position

2013/4/1
~2014/3/31



資産の部

	(単位：円)	
	本年度末	前年度末
固定資産	925,595,946	807,511,597
有形固定資産	818,953,384	701,823,947
（内建物仮勘定）	16,460,017	66,395,365
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
有価証券	64,930	64,930
預託金	21,670	7,760
退職金引当特定預金	7,146,846	4,145,435
40周年記念事業特定預金	0	496,853
奨学基金特定預金	72,538,176	72,381,072
奨学金特定預金	26,555,340	28,276,000
流動資産	175,806,961	142,563,863
現金預金	30,622,663	71,437,044
未収入金	382,470	14,093,986
貯蔵品	844,000	1,869,000
販売用品	2,787,865	2,726,138
有価証券	135,466,050	47,974,809
前払金	5,558,750	4,160,583
仮払金	112,163	302,303
資産の部合計	1,101,402,907	950,075,460

負債の部

固定負債	86,760,000	110,620,000
長期借入金	62,560,000	64,220,000
学校債	18,200,000	43,400,000
流動負債	120,970,506	97,502,692
短期借入金	63,660,000	67,830,000
学校債	33,210,000	15,600,000
未払金	2,810,734	3,798,446
未払金消費税	413,000	411,600
前受金	15,215,264	9,294,006
預り金	5,661,508	568,640
負債の部合計	207,730,506	208,122,692

基本金の部

基本金の部合計	953,355,042	813,283,370
---------	-------------	-------------

消費収支差額の部

翌年度繰越消費収入超過額	-59,682,641	-71,330,602
内今年度消費収入超過額	11,647,961	99,161,311

負債の部・基本金の部・

及び消費収支差額の部合計	1,101,402,907	950,075,460
--------------	---------------	-------------

左頁の注記の続き

(*4) 2013年度の消費支出の内訳

人件費支出	69,260,477
教員人件費	22,571,493
職員人件費	39,373,244
その他人件費	4,315,740
退職給与引当金繰入額	3,000,000
教育研究費	23,927,644
奨学費	4,549,490
光熱水費	2,109,542
見学費	2,529,367
実験実習費	4,628,990
学生交通費	90,368
学生渡航費	3,645,733
教材費	147,146
研究費	204,289
宿舍費	241,717
学生厚生費	649,321
職員研修費	31,300
事務費	263,084
車両費	2,091,704
卒業生同窓会支援費	184,950
特別講師費	774,080
雑費	500,000
貯蔵品の振替差額	992,000
管理経費	67,241,537
消耗品費	942,723
光熱水費	2,109,542
旅費交通費	2,433,542
募金費	1,438,680
車両燃料費	1,309,081
福利費	98,916
通信運搬費	779,815
事務費	3,751,285
出版物費	1,153,819
車両修繕費	1,582,951
営繕費	313,162
損害保険料	816,850
賃借料	1,400,333
公租公課	462,800
諸会費	184,624
会議費	267,955
報酬委託手数料	1,343,871
補助活動収入原価	3,689,438
行事費	373,910
渉外費	73,310
雑費・災害復旧費	14,943,009
減価償却費	27,771,920
借入金等利息支出	1,288,888
借入金利息支出	755,988
学校債利息支出	532,900
資産処分差額	113,271
消費支出の部合計	161,831,817

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、
2013年度の事業および会計の状況について監査した結果、
適正に執行されたものと認めます。

監事 波井 正明

波井 正明

監事 大屋 秀之

大屋 秀之

2014年5月8日
学校法人 アジア学院



農村指導者
研修

rural leaders
training course
participants

2013年度
卒業生

the 2013
graduates

【ブラジル】

1) マテウス・ジョゼ・コンラト 北部開拓者販売と土地改革協同組合

【カメルーン】

2) パメラ・ンジネ・ユフェンユイ カメルーン性差別と環境監視

【エクアドル】

3) アンドレア・マリソル・コヤギーヨ・ビスカイノ
教育のための日本・エクアドル連帯基金

【インド】

4) クヌサホ・ヴェロ ペ・バプテスト教会 5) ラルミンタンガ ベド協会

【インドネシア】

6) ネサンギタ・デヴィ・ユムナム 社会開発センター
7) エヴェリヤヌス・フメンドルー インドネシア・キリスト教団体ニアス研修センター
8) リハルソン・スィギロ スィマルングン・プロテスタント・キリスト教会
9) ヤンティ・ディアナ・ティゲ・ヤコブ スンバ啓発研修所

【日本】

10) 荒井 光政 11) 大室 さくら 12) 濱中 陽平

【ケニア】

13) ジェスカ・ンブチェ・シェヘ マガリニ・孤児養育施設

【マラウイ】

14) エネト・ンカスィクワ 中央アフリカ長老教会ンコマ教会

【ミャンマー】

15) ジョン・チンカータ 衛生管理プロジェクト 16) マーティン・カパラムラ 聖公会南マラウイ教区

17) アウン・ナイン・ウー マンダレーYMCA 18) ノー・センベル MCC - ミャンマーキリスト教協議会

19) ノー・エー・リー・トゥ カヤー・バプテスト連盟女性部

20) ザ・ベット・タン マラ福音教会

【ネパール】

21) バブラム・タルー AGBS - 農村開発基本サービス

22) マヘシュ・チョウダリ シスターホーム

【フィリピン】

23) キオラ・パティ・チョウダリ BASE - 後進社会のための教育協会

24) エドリエン・カバギオ・エガガマオ グリーンローズ4Hクラブ

25) ヴィクトリノ・ルエダス マグサイサイ多目的協同組合 第一キリスト教学校

【スリランカ】

26) ヴィーラコン・アーラチゲ・ドン・チャトゥリ・ウデーシカ・ヴィーラコン セワナタ都市資源センター

【タンザニア】

27) ンサフィリ・レオナルド・イレタ コミュニティ居住環境管理

28) ハピネス・ケネディ・ルエバンギラ 福音ルーテル教会、タンザニア北西教区

【タイ】

29) チャイヤ・ノンアサ タイ・キリスト教会

【ウガンダ】

30) ルース・パトリシア・ナムワンジェ

ホープ貧困児童センター HDCC

【ザンビア】

31) ゲトルード・ニレンダ

中央アフリカ長老派教会ザンビア長老教会

研究科生

training assistant

【ミャンマー】

ビャ・サムイェ

ミャンマー・バプテスト同盟
社会福祉・開発部
(2005年度卒業生)